

短期留学で広がった視野と看護の学び

看護学部 2 学年次生

私が今回、ケース・ウェスタン・リザーブ大学への短期留学プログラムを志望した理由は主に二つあります。

一つ目は、アメリカと日本の医療とどのような違いや共通点があるのか、またアメリカにおける看護師の仕事や社会的地位について興味を持っていたからです。

二つ目は、世界中で困っている人々を支援したいという思いを以前から持っており、海外の支援の実際を知りたいと思ったからです。今回は、それまで抱いていた興味を実際の行動に移す貴重な機会だと感じ、短期留学プログラムへの参加を決意しました。

現地では、小児病院やがんセンターなどの病院見学をはじめ、ホスピスや高齢者福祉施設の見学、さらにケース・ウェスタン・リザーブ大学看護学部での講義・演習、コミュニティ実習に参加しました。

病院や施設の見学では、通路の壁に多くの美術作品が飾られており、酸素配管を絵画で覆うことで“家のようなデザイン”にしている病室の工夫が印象的でした。患者目線に立った環境づくりが患者の安楽につながることを実感し、療養生活における環境整備の重要性を学ぶことができました。

また、コミュニティ実習では地元の小学校を訪れ、小学生の身長・体重・視力の測定を学生主体で行っていたのが印象的でした。準備段階では、効率よく進めるための測定の順序や、年齢に応じた工夫について話し合い、年齢への配慮を学びました。実際の測定が始まると、日本との違いがさまざまな点で見られました。小学校には様々な生徒がおり、髪型に合わせて定規をもちいたり正確な測定ができる工夫が考えられていて、驚きました。また、各測定場所では、学生が小学生に名前を聞いた際に、「いい名前だね」「かっこいいズボンだね」「素敵な靴だね」など、その子に合った一言をかけていたことがとても印象に残っています。こうした声かけが、小学生に安心感を与え、測定を受けやすい雰囲気づくりにつながっていると感じました。さらに、学年ごとに測定が終わるたびに、学生・指導者・先生全員で集まり、振り返りや改善点を話し合っていたことも印象的でした。

コミュニティ実習は週に1回と日本よりも頻度が高く、看護学部の1年生から4年生までが混合でグループを組むため、リーダーシップやチームで協力する力が自然と養われると感じました。この実習に参加できたことは自分にとって大きな学びとなり、ケース・ウェスタン・リザーブ大学の学生たちとコミュニケーションを取りながら楽しく学ぶことができました。

短期留学への参加を考えている学生へのメッセージ

英語ができない、勇気がないなど思う人もいるかもしれませんが、私も英語は全然得意ではありませんでした。しかし、大学が主催する留学だったことで先生方のサポートと一緒に参加した学生同士で学びを共有することができ、留学を終えた今はチャレンジしてとてもよかったと思います。看護職を目指すうえで、今回の留学を通して日本とは大きく異なるアメリカの医療制度や健康課題、看護師の社会的地位などについて学ぶことができたことは、今後、より広い視野で異文化における健康課題や看護について考えるきっかけとなったと思います。



一生の思い出に残る貴重な体験！

看護学部2学年次生

まず私がケース・ウェスタン・リザーブ大学に短期留学しようと考えた理由は主に2つあります。

1つ目はアメリカの医療に興味があったからです。アメリカでは最先端の医療が実施されています。短期留学を通し、アメリカの病院の様子を生で見て、アメリカと日本における看護の違いや工夫、文化による価値観の違いを学びたいと考えました。

2つ目は海外留学に興味があったからです。高校生の時、コロナウイルスの流行により海外への短期留学の機会がなくなってしまい諦めていましたが、今看護を学んでいる中で、一般的な語学留学とは一味違った看護留学だからこそできる経験や出会いに魅力を感じ、このような体験に挑戦したいと考えました。

プログラムを通して、講義や実習の見学、老人施設、ホスピス、がんセンター、小児病棟などの医療施設の訪問し、幅広い経験をすることができました。施設見学で日本と大きく異なると感じたことは、アメリカの医療施設ではほぼ全ての部屋が個室になっており、居住者、患者さんだけでなくそのご家族の方も快適に過ごせるような工夫がされていたことです。またアメリカは多宗教であることからお祈りをする部屋も用意されていました。このように全ての人が入院期間もその人らしく生きられるような工夫がされていると学ぶことができました。

また、講義では「気候変動と看護」の関係性についてレクチャーを受け、気候変動は単なる環境問題ではなく、人々の健康と生活に直結する問題であり、看護職は予防・ケア・教育・支援といった多面的なアプローチで関わることが求められていると学ぶことができました。看護学部の講義と演習に参加させてもらった際には「頭とリンパ節のアセスメント」に関する内容をまず講義で学び、その後実際に学生同士ペアで診察を行う演習を行っていました。日本では行っていない内容の演習であり、講義と演習が繋がっているため新たな知識や考え方を身につけることができる良い経験となりました。

そしてプログラム以外でも、バディになってくれたケースの学生が軽食に誘ってくれて、たくさんお話ができたり、ダンスしたりととても仲良くなることができました。また、本場のオーケストラやミュージカルを鑑賞することができたりと、より充実した時間を過ごすことができました。

短期留学への参加を考えている学生へのメッセージ

短期留学に参加して、海外の医療や看護について学ぶことができたのは、私にとってかけがえのない経験になりました。初めて行く土地で英語も通じるかもわからないという不安もありましたが、引率の先生や友達がいるので安心して参加できました。現地では言葉の壁を越えて多くの学びがあり、自分の視野も広がりました。英語が苦手でもみんなと協力すれば大丈夫なので少しでも興味があるなら、ぜひ一歩踏み出してみてください。

今しかできない貴重な体験になります！



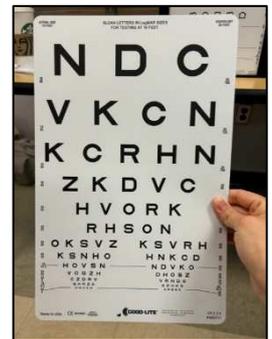
留学に行ってみよう！

看護学部3学年次生

私が留学に参加した理由は、アメリカの医療や異文化交流に興味があり、未経験のことに挑戦することで、自分自身を成長させる機会になると考えたからです。留学中は大学での授業や演習に加え、ホスピスやがんセンターなど、さまざまな施設を見学させていただきました。ここでは、特に印象に残ったのは、次の3つです。



まず1つ目は、コミュニティ実習です。小学校を訪問し、児童に対して身体測定を行うという実習で毎週行われているということでした。視力検査では、日本では一般的にランドルト環の視力表が使われますが、アメリカではアルファベットや絵が描かれた視力表を子どもの年齢に応じて使い分けていました。中には答えに詰まってしまう児童もいましたが、その際は学生が優しく声をかけ、サポートしており、児童たちが安心して検査を受けられるような環境が整えられていると感じました。学生たちが自分たちで考え、積極的に行動しており主体性を育むことができる実習だと感じました。



2つ目は、ホスピスの見学です。そこでは看護師、ソーシャルワーカー、ボランティア、スピリチュアルケアコーディネーターなど、さまざまな専門職が連携し、患者や家族を支援していました。アメリカでは専門職の役割分担が明確であるため、患者のニーズに応じた最善のケアが提供できると感じました。身体的なケアだけでなく、精神的なサポートも手厚く行われている点に深く感銘を受けました。ホスピス＝「死にゆく場所」ではなく、患者の望みを叶え、最期までその人らしく、よりよく「生きる場所」であることを実感しました。

3つ目は、大学での授業や演習です。授業は予習を前提に進められ、疑問点があればその場で質問し、すぐに解決する姿勢が印象的でした。こうした学びの姿勢に触れ、自分自身の学習態度にも良い刺激を受けました。

短期留学への参加を考えている学生へのメッセージ

留学を考えている方で英語力に不安がある方もいると思います。もちろん話せるに越したことはないですが、私は英語がペラペラに話せる訳ではありません。でも、頑張って英語を話そうとすることが大事だと感じました。また、日本語を学んでいる学生と交流できる機会もあり、異文化交流できたこともいい経験になりました。自分の知らない世界を知れてとても楽しかったです。

ぜひ、参加してこの瞬間にしか味わえない思い出を作ってください！！

